

英語学・英文学研究の英語教育への応用について

— 機能語・比較構文の指導例から —

坂本育生*

(1997年10月15日 受理)

On the Application of English Studies to English Education

Ikuo SAKAMOTO*

(はじめに)

英語学・英文学そして英語教育学は、英語関係者の専門を区分する上での重要な三分野であるが、最近、それぞれの学会や研究発表の場が、かなり細分化されてしまい、三分野相互の接触も、希薄になっているように思われてならない。しかしながら、本来英語を研究媒体とすることは、三分野に共通しており、実際に、大学・短大等の教育現場において、教師として学生と接触する際には、自分の専門分野のみに偏らず、英語学・英文学、そして英語教育学を総合的に捉えた、オールラウンドな教育が求められている。

事実、最近の共通教育（従来の一般教育）においては、人文、社会、自然の分野の区分を取り去った、総合的な教育が、全国各地の大学で実施されてきており、この傾向は、英語教育においても同様である。つまり、英語教師は、自分の専門領域のみでなく、英語学・英文学に関しての一般的知識や、それに加えて、理科系、文科系諸学部に関連した専門英語の知識も求められているのである。まさに、英語教師試練の時代の到来、と言えるであろう。¹⁾

そこで本稿においては、筆者のこれまでの学生指導経験に基づき、英語学・英文学研究を、英語教育に応用した実例をいくつか紹介し、今後の英語教育と英語教師のあり方について、若干論じてみたいと思う。具体的には、前置詞、接続詞等の機能語や比較構文等の英作文での指導や、文学作品の講読の授業等をその基盤としている。²⁾

さらには、従来、中学、高校、大学と8年あまりも英語学習を続けながら、ろくに日常会話もできない、と批判される我国の英語教育の現状であるが、最後に本稿で紹介する総合的な英語教育や、最近注目を集めている、「トピックメソッド」を推進すれば、TOEFLで500点、TOEICで700点あまりの得点は、普通の日本人にとっても、充分可能であることも御紹介したい。

*鹿児島大学教育学部

(I) **till, until 等の機能語の指導事例**(I)-(i) **英語学研究の英語教育への応用**

旧教養部時代以来、英文解釈、英作文、英文法、英会話等の、文字通り全ての分野に渡る指導をしてきたが、ある英作文の授業の際に、“The shop is closed *till* Monday.” という例文があり、はたしてこの表現においては、Monday は含まれるのか含まれないのか、ということが問題になった。つまり、*till* と、その同意語 *until* には、*before* と *to* の両方の意味があり、境界線の部分を含むのか、それとも含まないのか、の識別が曖昧で、高校生、大学教養生がよく使っている「英和辞典」程度の説明では、十分な説明ができないのであった。まずは次の例文を見てみよう。

- (1) The shop was closed *from* the 5 th *till* the 8 th.

便宜上和訳してみると、「その店は、5日から8日まで閉店していた。」となり通常の日本人の感覚では、その店は5日から8日までの4日間閉店し、9日から開店した、という解釈をしてしまうであろう。ところが、様々な辞典や参考書を調べてみると、冒頭にも述べたように、*till* および *until* には、*to* と *before* の両方の意味がある。従って、境界線が含まれる場合と、そうでない場合の両方の解釈が可能なのである。分かり易くするために、例文(1)を *to* と *before* を用いて書き替えると、次のようになる。

- (2) The shop was closed *from* the 5 th *to* the 8 th.

(その店は、5日から8日まで閉店だった。)

- (3) The shop was closed *from* the 5 th *before* the 8 th.

(その店は、5日から8日の前〔7日〕まで閉店だった。)

筆者の周囲の数人の学識ある英米人に対して *native check* を行なってみたが、彼らも全員、*till*, *until* の曖昧性 (*ambiguity*) を認めており、曜日や日付のように非連続的で、いわゆる *digital* 式記述の場合には、*till*, *until* の使用は避けるべきである、というアドバイスをくれた米国人もいた。³⁾

それでは、このように意味曖昧で、一見不完全に思われるような機能語ならば、*till*, *until* は使用しないほうがよいのではないかと、いう考えが出てくるが、実際の言語運用の場においては、必ずしもそうではないのである。それどころか、かえってその曖昧性があるゆえに、容認されるケースもあるのである。特に、過去時制の文においては、範囲を明確に限定する *to* を使用すると誤りとなり、曖昧性を持った *till*, *until* の方が容認される。例えば、「私は彼女を6時まで待ったが、彼女は来なかった。」という日本語を英訳すると、どのような英文になるのであろうか。Michael Swan

の *Practical English Usage* には、次の例文が、Typical mistake として挙げられている。⁴⁾

- (4) * I waited for her *to* six o'clock, but she didn't come.
 (5) I waited for her *till/until* six o'clock, but she didn't come.

Swan の説明では、to は現在、未来においては使用されるが、過去時制においては使用されず、かわりに、till もしくは until を使用する、としか記述されていない。そこで例文(4)、(5)にもう少し考察を加えてみると、ここにおいて、till, until の持つ曖昧性が重要な意味を持つてくるのである。つまり、例文(4)が、なぜ文法的にも容認されないのか、を考えてみると、to の場合には、場所や時間の境界線や到達点を明確に限定するので、過去時制において to を使用すると、ちょうど6時まで待った、ということになり、少しでも6時を過ぎると、to の限定する範囲を越えてしまい、語法上の誤りとなってしまう。それゆえに、あまりにも範囲や時間を明確に限定することは、言語運用の場では、不自然で不可能な場合もあるのである。従って、その曖昧性があるが故に、かえって、till や until を使用した、例文(5)の方が容認されるのである。一見馴染み深い前置詞や接続詞の用法をとってみても、その正確な使い方を習得するには、英語を母国語としない者にとっては、非常に困難なことであり、改めて、英語学の奥深さを思い知らされる。

さて、上記の till, until 語法研究は、明らかに英語学の研究分野であるが、その発端となったきっかけは、英作文における、前置詞の正しい用法の指導、という英語教育学の分野からのものであった。元来、文法事項の正しい指導のためには、英語学の知識は必須のものであるから、この事例は、まさに、英語学研究と英語教育が一体化した好例のひとつと言えるであろう。

(I)–(ii) 英文学研究の英語教育への応用

次に、文学作品の講読の授業の際に、前置詞 to と till の相違を明確に表わした、非常に興味深い用例を発見したので、ここに挙げておこう。⁵⁾

- (6) Boxer was the admiration to everybody. He had been a hard worker even in Jone's time, but now he seemed more like three horses than one;..... *From morning to night* he was pushing and pulling, always at the spot where the work was hardest.
 (George Orwell, *Animal Farm*)

「朝から晩まで」という言い回しは、普通、“from morning till night”となり、“from morning to night”とはならない、と学校文法では教わる。「～から～まで」という言い方は、通常は、“from ~ to ~”という熟語を使うのに、なぜこの場合には to ではなくて till を使うのか、と疑問に思われた方も多いのではなかろうか。この疑問を解決する際にも、till, until の持つ曖昧性が、再び重要

な意味を持つのである。つまり、通常使用される“from morning till night”という場合には、境界線が曖昧であるために、時刻が夜になるかならないかの境目あたりの時刻、という微妙なニュアンスが隠されているのである。しかるに、例文(6)のように、“from morning to night”という言い方になると、文字通り night がその時間の範囲内に含まれることになる。従って、通常我々が、日本語で、「朝から晩まで」と言う場合には、朝から夕方あたりまでの時間を指している場合が多いので、“from morning till night”の言い方の方が、頻繁に用いられるのである。一方、例文(6)の場合には、“from morning to night”という特殊な表現から、人間の農場主 Jones 氏たちを追放したあと、Animal Farm の運営のために、馬の Boxer が「朝から夜おそくまで」一生懸命働いている様子が、読者に伝わってくるのである。先にも述べたように、一見何気なく使用している、till, until, to といった機能語も、その詳細な用法を調べてみると、それぞれに微妙な相違があり、正確な用法の習得はなかなか困難なことが分かる。

さて、例文(6)は、文学作品から興味深い例文であったが、英語学の研究においても、このような実際の言語運用の場である文学作品から、適切な例文を資料として探し出すことは、極めて重要な作業である。特に、筆者のように、具体的な言語現象をその研究対象とし、それらを機能的に分析してゆくことを目的とする者にとっては、適切な用例の発見こそが、研究成功への鍵である、といっても過言ではない。まさに文学作品の地道な講読と、英語学研究とは、切っても切れない縁によって結ばれているのである。さらに、その文学作品講読も、日頃からの教室での学生指導の一貫としての英語教育の成果であり、これまた英語学・英文学研究と英語教育が一体化した上において為せるものである。

(II) more than, less than 等の比較構文の指導事例

(II)-(i) 英語学研究の英語教育への応用

この章では till, until のような機能語の指導に続き、比較構文についての指導事例について言及してみよう。通常何気なく使用している馴染み深い構文であるが、細かい点に注意してみると、様々な問題が存在することが分かる。まず最初に、次の例文について検討してみよう。

(7) He is *more than* eighty years of age.

この例文(7)を、どのように解釈すべきかという問題が、やはり以前、英作文の授業の際に問題になった。一般に、「more than ~ = ~以上」と解釈しているので、「彼は80歳以上の年令です。」と解釈してしまうであろう。ところが、厳密に言えば、more than と、その反対の劣等比較の less than の比較構文は、様々な参考書や辞書、あるいは、教養ある英米人の native check によると、その境界線を含んだ「~以上、~以下」を意味するのではなく、境界線を含まない、「~を越える、~

未満」の意味なのである。尤も、実際の言語運用の場においては、英米人たちの間でも、その用法はかなり曖昧な点があり、例文(7)も、一般には、「彼は80歳以上です。」と解釈してもよいのである。⁶⁾

まず、多少古い辞書からの記述であるが、日本語での「～以上」との関係をふまえ、*more than* の定義と解説を引用しておこう。

(8) *more than* : ～以上 : 文語, 口語を通じて最も一般的の語。[対] *less than*

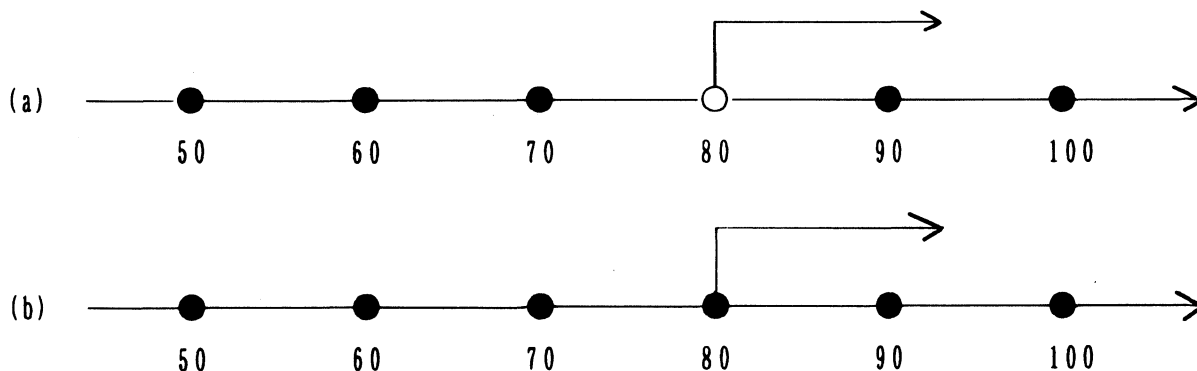
[注意] 「歩いて10分以上かかる」という邦語は「10分か或はそれ以上」の意で、「10分」を含むものであるから、“It is more than 10 minutes' walk.”とは訳されない。英語の *more than 10 minutes' walk* には、10 minutes は含まれないから。故に、「十分以上」は、“not less than ten minutes”と訳すべきである。「寄付金は百円以上であるべきこと」は、“The subscription shall be more than 100 yen.”でなく、“not less than 100 yen”と訳すべきである。かように英語では *more than 100* は、100 を含まないから、邦語の「百以上」は 100 or more と訳すべきである。⁷⁾

なかなか厳密な解説であるが、*Question Box Series* でも述べてあるように、若干厳しすぎるように思われる。⁸⁾ 事実、*native check* を行なっても、“It's more than ten minutes' walk.”で充分に意味は通じるし、10分を含むか含まないか、といった問題は、時間という連続的で *analogue* 式な記述の場合には、ほとんど問題とはならないのである。また、解説のように、“It is not less than ten minutes' walk”と修正してみると、「少なくとも歩いて10分かかかる。」という意味になり、確かに10分ちょうどを含むかもしれないが、強調される力点は10分ということになり、10分以上に力点を置くところの、*more than ten minutes' walk* とは、ニュアンスがかなり違ったものとなる。それに、*native speaker* にとっても、*more than* や *less than* の構文に否定表現を伴う言い方は、かなり混乱をまねくものであるから、文語体で意図的に使用する以外には、あまり使用しない方がよい、とのコメントであった。

また、「寄付金は100円以上」という表現の場合でも、英米人の一般常識としては、“more than one hundred yen”という言い方で、充分通じるとのことであった。ただし、確かに曖昧性も残るので、その場合には、“including 100 yen”と付加しておけば、混同は起きないであろう、とのことであった。さらに、最も適切と思われる表現は、“The subscription shall be at least 100 yen.”であろうとの *native* のコメントであった。いくら正確さを求める、といっても、あまりにも厳密になりすぎると、*too strict, too artificial* となってしまうのである。

そこで、先の例文(7)を数直線上に表わしてみると、次のようになる。

(7) He is more than eighty years of age.



つまり、厳密に言えば、more than という表現は、本来その境界線を含まないで、(7)-(a)のように解釈されるべきかもしれないが、時間や空間のように連続的で analogue 式記述の場合には、(7)-(b)のように境界線を含めて解釈しても差し支えないのである。

一方、厳密に、“more than eighty years of age”を「80歳を越えている」という意味にとれば、「81歳以上」なのか、と感じてしまい、それはむしろおかしいように思われる。つまり、80歳の誕生日を過ぎれば、digital 式の年齢においては80歳であっても、analogue 式の年齢においては、80歳を越えていることになるからである。この場合には、80歳を含んだ80歳以上、と解釈できるであろう。

ただし、「7歳未満は入場無料」(Admission is free *less than seven years of age.*) のように厳密さが求められる場合には、1日の違いが極めて大きな意味を持つので、使用にあたっては、細心の注意を払わなければならない。⁹⁾

以上のように、more than, less than の比較構文の指導事例について述べてきたが、この場合も、先の機能語の指導事例と同様に、英語学研究と英語教育が、極めて密接に結びついたものである。まさに、英語学と英語教育学は、切っても切れない縁にある。

(II)-(ii) 英文学研究の英語教育への応用

次に、先の機能語の指導事例の場合と同様に、比較構文の興味深い用例を、文学作品の中からいくつか挙げてみよう。

最初に、境界線を含まない、と考えられる用例である。

(8) The next moment he and his four men were in the store-shed with whips in their hands, lashing out in all directions. *This was more than the hungry animals could bear.* With one accord, though nothing of this kind had been planned beforehand, they flung themselves upon their tormentors. (George Orwell, *Animal Farm*)

- (9) Many years ago, a very small yadoya in Tottori town, received its first guest, an itinerant merchant. He was received with *more than common kindness*, for the landlord desired to make a good name for his little inn.

(Lafcadio Hearn, *Kwaidan*)

これらの用例は、いずれも程度の相違、限界を越えるもの、という抽象的な表現の記述であり、*more than* のもつ本来の性質を適切に表わした表現であろう。

次に、*digital* 式な数を表わす表現においても、「～を越える」の意味で使用されている用例が数多く見られる。例えば、厳密に言えば、*more than five books* という表現は、「5冊よりも多くの本」つまり、「6冊以上の本」という意味があるが、類似した用例を二つ列挙しておく。

- (10) When a nimble Burman tripped me up on the football field and referee (another Burman) looked the other way, the crowd yelled with hideous laughter. This happened *more than once*. In the end the sneering yellow faces of young men that met me everywhere, the insults hooted after me when I was at a safe distance, got badly on my nerves. (George Orwell, *Shooting an Elephant*)

- (11) My dear husband, our union must have been brought about through some karmarelation in a former state of existence; and that happy relation, I think, will bring us again together in *more than one life* to come. (Lafcadio Hearn, *Kwaidan*)

上記の2例は、いずれも、「1より多い、つまり2以上」の意味である。このような事例の場合には、厳密に対応しなければならない。¹⁰⁾

このように、文学作品は、興味深い用例の宝庫であり、単なる事例的な例文とは異なり、文脈や状況も考慮に入れた、極めて重要な意味を持った例文となる。最近、数学的であまりにも機械的になりすぎた感のある英語学研究であるが、今一度、英語学の原点に戻っての、地道な文献学的な研究を見直す必要があるように思われる。

また、このような文学作品における例文の発見も、先の *till*, *until* の場合と同じように、教室内での英文講読の成果であり、文学作品の正確な解釈のためにも、英語学の知識は必須のものであるし、そのことが、英語教育の一層の充実につながることは、自明のことであろう。まさに、英語学、英文学、そして英語教育学は、三位一体となったものである。

では次章で、これからの英語教育にとっての新たな指針となる、*listening* を重視した、トピックメソッド (TOEIC Method) について述べておこう。

